

第 I 章 調査の経緯

第 1 節 調査にいたる経緯

古代山城鬼ノ城の所在する地は、地元では古くから「温羅^{うら}伝承」の主舞台として親しまれてきた。伝承に登場する血吸川上流の断崖絶壁の地にそそり立つ大きくて長く続く高い石垣、眼下には吉備の沃野がひろがり、吉備の中山の南麓には瀬戸の内海が入り組む。まさに伝承の温羅の居城にふさわしい地である。大きな石を積み上げた石垣とそこからの眺望は多くの人々に親しまれ、昭和12年（1937）には岡山県観光名勝百選に選ばれており、いまでも近くにその記念碑が立っている。

伝承の世界はさておき、この長さ130余m、高さ5m超の石垣は、立地や構造等からみて城の石垣であることは疑うべくもないが、いつの時代に構築されたのかを証する決め手に欠け、謎のベールにつつまれたままであったが、いつの時代かにこの地に城があったことを想起させていた。しかし昭和46年（1971）になって高橋 護氏により、厚いベールが剥がされることとなった。

氏は『日本書記』天武八年三月条の「吉備大宰石川王、病して吉備に薨せぬ。」の記載から、“吉備大宰府”の存在を想定され、その防衛陣地が近くにあるのではないかと推測された。天武朝に大宰府に関するものとしてみえるものはなにか、防衛施設であればみえるのではないかと、との認識からいくつかの候補地を検討され、伝承でいう温羅の居城鬼ノ城を最有力地として踏査された。昭和46年にはこの地で山林火災があり、焼け跡の踏査で列石と水門を発見され、神籠石系山城として発表された。吉備中枢部における初の発見であり、翌年には備前で大廻小廻城も発見され、吉備における二城の発見は大きな話題になった。蛇足だが、『続日本紀』養老三年十二月条には「備後国安那郡の茨城、葦田郡の常城を停む。」の記載があり、城地未確定ながら吉備に四城があったことになり、この地がいかに重要な地であったかを窺わせる。

氏はその後も何度もこの地を踏査され、昭和51年（1976）には鬼ノ城について、傾斜変換点のあたりに石塁もしくは土塁で築かれた遺構が残っており、塁線の延長は2.8kmにおよび、水門の石塁が南東側に6ヶ所設けられており、城内の中央部に建物の存在した可能性がたかいこと、正面側麓下の谷の入り口に小水城状の土塁があるとされ、また塁線の構造等にもふれられている⁽¹⁾。

こうした報告をもとに、昭和53年（1978）に坪井清足氏を調査団長に「鬼ノ城学術調査団」が編成され、初の学術調査が行われることになった。この調査は主として外郭線沿いの伐開作業を行った後、航空測量による地形実測図の作成であり、発掘調査は第2水門の一部で小規模な調査がおこなわれた。その成果は昭和55年（1980）に、写真図版がオールカラーという初の試みで『鬼ノ城⁽²⁾』という書名で刊行された。調査期間二ヵ月間という短期間の調査であったが、すばらしい成果をあげられているので、その概要を箇条書き的に要約して紹介しておきたい。

1. 遺跡は、吉備高原最南端にあたる標高399.9mの鬼城山を中心に所在する。
2. 外郭線は急斜面と準平原とのおりなす傾斜変換点に、石塁と土塁とが一体化した城壁が四条の谷を包摂して延々とめぐり、鉢巻状に一巡する。外側長の総和は2790.8mで、いくぶん増える可能性はあるが、3kmを超えることはなく、約2.8kmとみるのが妥当である。
3. 外郭線を形成する塁状遺構は、数mないし10数mを測る直線で構成され、一定の角度をもって結

節する。つまり随所に「折」をもつ点に形態上の一つの特徴がある。

4. 城壁は原則として両面築造法をとり、平均幅7m、高さ約6mを測る。外側には高石垣を築きその上に版築による土塁を積む。高石垣は自然地形の形状によってしばしば神籠石状列石におきかえられる。全体として土城というよりむしろ石城の趣が強い。

5. 水門はこれまでに確認されていた三カ所のほか、あらたに二カ所で確認され、計五カ所が知られた。水門は、足守川流域平野ならびに総社平野を眼下に見る防御正面に構築されるという企画性を持ち、例外なく味方折の部位に築造する特徴をもつ。構造上の特徴として、通水溝開口部はいずれの水門においても石組遺構上部に設置されていることであり、北九州の古代山城にはみられない特異な構造である。また要所に敵折の区間を設けて、敵兵の偵察にそなえた企画がうかがえる。

6. 城門は、第1～第3城門跡の三カ所が推定される。第1城門跡は、門柱礎石等の遺構は検出されなかったが城門跡としての蓋然性は強く、また第3城門跡は中世以降の城郭にみられる「搦手門」的な門跡と推察される。

7. 水門跡と城門跡の位置関係についてみれば、対馬金田城、筑前基肆城など城門が水門に付設する構造とはまったく異なり、城門と水門が隣接して築かれていない点を指摘できる。

8. 城内の平面形態はいびつな倒卵形とでもいうべき形状で、城内の長軸は南西から北東方向にあり、直線距離で894m、ほぼ直交する方位での短辺は最小幅106m、最大幅602mである。城内の面積は、城壁の基底幅を除いてなお、291,671㎡、約29haを算する。

この調査は短期間の、制約された調査であったが、素晴らしい成果であり、以後の調査の大きな指針となったことはいうまでもない。

昭和58年（1983）秋、城内のほぼ中央部で礎石建物跡5棟が発見された。学術調査時には推定しつつも時間的制約からはたせなかった待望久しい礎石建物跡の発見であり、鬼ノ城が古代山城の構成要件をまた一つ具備することとなった。この年の夏には国指定史跡の申請を行っており、そうした意味でも価値ある発見であり、昭和61年（1986）3月25日国指定史跡となった。指定面積1,125,629㎡で、城内域は無論のこと、斜面のかなり裾部までを含んでいる。しかし城内域44,220㎡を含み、外郭線より下方は私有地であったため公有化を図り、地権者の皆さんの暖かいご理解とご協力をえて平成元・2年（1989・1990）で公有化を終えることができた。

こうして調査、整備公開の基盤は確立したが、当時はいまだ公共事業や民間開発事業に伴う発掘調査に追われ、鬼ノ城に着手する人的、時間的余裕がなく、それらが多少緩和した平成5年（1993）になって漸く始動することになった。

しかし整備公開するといっても、遺跡の具体像は描けない状況であった。確かに学術調査団の調査によって、遺構の個々の様相はかなり具体的になっていたが、それらは発掘調査による知見ではなく、また城門も確定しておらず、城内の建物についても不明であった。このため発掘調査を実施し、その成果にもとづいて整備計画を立案、実施することとし、この年「鬼城山整備委員会」を設置した。委員には斯界の権威の先生方をお願いし、発掘調査と整備計画案の策定について指導していただくこととなり、委員の互選で委員長に坪井清足先生、副委員長に近藤義郎先生が就任されることとなった。

註1 高橋 護「鬼城山・築地山」『考古学ジャーナル』117 1976

2 『鬼ノ城』鬼ノ城学術調査委員会 昭和55年

第2節 調査の概要

以上のような経緯を経て、翌年の平成6年（1994）度から発掘調査を開始した。初年度は学術調査で城門の蓋然性が高いとされた第1城門跡（のちに東門跡と改称）を対象とした。この城門は前年に高石垣の危険箇所の点検作業中に、偶然に方立穴を刻んだ門礎を発見し、城門跡と確定していた。調査は翌7年度にも継続して行った。この調査で1×1間の掘立柱城門で、門道部床面を石敷にし、床面と城門前面に2mほどの段差をもつ城門と判明した。ついで平成8年（1996）度には第3城門跡推定地とされ、搦手門的な門跡が想定されていたところで実施した。調査の結果ここには門跡はなく、城壁の一部が張り出した特殊な遺構（角楼跡）であることが判明し、城壁の前面に敷石が敷設されていることも判明した。しかし地形的にみて、近くに門跡があるのではないかという委員会の先生方の指導により、周辺部を調査したところ新たに発見したのが西門跡である。この西門跡の調査の知見から、新たに城門跡が推定され、確認調査の結果その推定地が城門跡（南門跡）であることが判明した。

南門跡は平成9年（1997）度に調査し、3×2間の大規模な掘立柱城門であることが判明した。この調査では門道部の規模や柱間距離がきわめて近似しており、あるいは西門跡も同様なものではないかと推定し、補足調査したところ、二つの城門は同工同大であることを確認した。この年、背面側にも門跡の可能性のあるところがあり、確認調査したところ城門跡（北門跡）と判明した。

こうした調査の結果、鬼ノ城には正面側に3門、背面側に1門の四つの城門が構築されていた状況があきらかになった。四つの城門は規模の大小は当然あるものの、いずれも掘立柱城門で、門道部床面を石敷とすることを共通の特徴とし、うち3門は床面と城外地表面にかなりの高低差をもつ懸門である。平成10年（1998）度は、西門跡とその周辺部および最高所の鬼城山一帯の調査を行った。この調査では、高石垣前面にも敷石が敷設されていることや、内側列石に添うような状態で土塁中にほぼ3m間隔で柱穴列のあること、外側列石前面にもほぼ3m間隔で版築の堰板を固定したらしい柱穴があること、土取場らしい採掘跡、烽火場らしい痕跡なども確認した。

平成11年（1999）度には岡山県古代吉備文化財センターによって、城内のほぼ全域と麓下の「水城」状とされる地の確認調査が行われた。城内の調査面積だけでも5,830㎡におよび、新たに礎石建物跡や鍛冶遺構などが検出された。

平成12年（2000）度は、前年までの調査での成果から整備事業の基本計画が策定されたことをうけ、角楼跡から第2水門までの間の壘状区間の確定をめざした調査を行った。この調査で前年の調査で推定しつつも確定できなかった新たな水門跡（第0水門跡）を確認した。また土塁や高石垣、西門や角楼などが構築されていることからみて、それらの構築に要した用資材などを搬入したであろう作業道、登城道の確認調査を行ったが、成果は得られなかった。

これらの調査については、簡略ではあるがこれまでに『総社市埋蔵文化財調査年報』5～9、11に報告しているので参照されたい。

平成13年（2001）度の調査は5月7日から11月2日にわたって実施した。整備事業計画が策定され、実施されることになったので、西門から40mほど東の高石垣から第2水門までの区間の城壁内外と北門跡の調査を行った。北門跡はほぼ全掘した。第2水門までの区間は第1期の整備事業の中核となる区間であり、西門から第0水門までの区間は復元整備を予定している区間である。しかし整備工事が

始まるまでには多少の期間があり、土塁を全掘すると崩落も懸念されるため、墨線の走向の確認を主体とする調査にとどめた。

発掘調査の指導と整備事業計画を審議していただく「鬼城山整備委員会」は、第13回委員会を平成13年5月17日、第14回委員会を同年10月11日に実施し、他方面にわたるご指導をいただいた。

平成14年（2002）度の調査は、高石垣～第0水門間の整備事業が翌年に実施されることになったため、前年に確認したこの区間の流土をすべて排土するとともに、背面側の城壁の不確定区間の確認調査を4月18日から9月10日まで行った。整備委員会は第15回委員会を同年4月25日、第16回委員会を6月23日に行い、さらに版築土塁の復元整備工事の進捗状況の視察もあって第17回委員会を11月8日に開催した。

平成15年（2003）度の調査は、計画策定に伴い角楼周辺で実施した。この調査では整備工事に先行して一部で遺構の補修や整備工事のために、埋め戻している遺構などの掘り上げも含めて4月14日から8月6日まで行った。整備委員会は第18回委員会を4月24日、第19回委員会を9月27日、第20回委員会を平成16年2月26日に開催した。なお、西門の復元工事は同年度で実施され、昔日の威容に復された。

第3節 調査の組織

鬼城山整備委員会

- | | |
|------|--------------------------------------|
| 委員長 | 坪井清足（元興寺文化財研究所長） |
| 副委員長 | 近藤義郎（岡山大学名誉教授）（平成5年3月22日～平成14年4月30日） |
| 委員 | 水内昌康（元岡山県文化財保護審議委員） |
| | 高橋 護（ノートルダム清心女子大学教授） |
| | 狩野 久（京都橘女子大学教授） |
| | 濱島正士（別府大学教授） |
| | 河本 清（くらしき作陽大学教授） |
| | 葛原克人（ノートルダム清心女子大学教授） |
| | 高瀬要一（独立行政法人文化財研究所 奈良文化財研究所遺跡研究室長） |
| | 稲田孝司（岡山大学教授）（平成15年7月14日～） |

委員諸先生方には、寒暑ご多忙にもかかわらず、現地で積極的なご指導ご助言をいただき、また整備基本計画案の策定、実施について、ご検討ご提言など多方面にわたって多大なご支援をいただいた。また、文化庁、岡山県、岡山県教育委員会など関係機関各位からもご指導ご助言をいただいた。深く謝意を表します。

なお、近藤義郎先生には鬼城山整備委員会設置時より副委員長として、積極的なご指導をいただいたばかりでなく、委員会開催時以外にもしばしば調査現場を訪れてくださり、暖かく心強い励ましやご指導ご助言をしていただいた。しかしながらご体調不良のためご辞任された。ご高恩に対し、あらためて深く謝意を表します。

また、稲田孝司先生には新たに委員をお願いし、ご快諾いただいた。

調査組織

教 育 長 栗田交三
教 育 次 長 大村 稔（平成13年4月1日～14年7月31日）
本行輝二（平成14年8月1日～15年3月31日）
丸山光男（平成15年4月1日～16年3月31日）
文 化 課 長 加藤信二
文化財係長 谷山雅彦（調整担当）平成15年4月1日より課長補佐
主 事 笹田健一（庶務担当）
主 事 松尾洋平（調査担当）

総社市埋蔵文化財学習の館

館 長 村上幸雄（調査担当） 臨時職員 近藤雅子 田中富子

当該年度にわたり、岡山県古代吉備文化財センターからは下記の職員の方々を派遣していただき、調査にご協力していただいた。記して謝意を表します。

平成13年度 大橋雅也、小林利晴、重根弘和
14年度 大橋雅也、小林利晴、河田健司
15年度 光永真一、大橋雅也、杉山一雄、小林利晴、團 奈歩

また、下記の方々には現地等で多くのご教示ご指導をいただいた。記して深く謝意を表します。

亀田修一 沢田正昭 肥塚隆保 田中淳也 禰宜田佳男 山本悦世 正岡睦夫 柳瀬昭彦
高畑知功 平井泰男 江見正巳 乗岡 実 金 晶 鎬 成 周 鐸 車 勇 杰 成 正 鏞 沈 正 輔
呂 洪 基 向井一雄 北垣聰一郎 直木孝次郎 上田正昭 内田和伸 朴 鍾 益 義則敏彦
賈 鍾 寿 宋 萊 燮 須原 緑 渡邊芳貴 小川秀樹 松波宏隆 山田隆文 山元敏裕 今井和彦

また今村峯雄氏にはご厚意により、第0水門付近で出土した木質遺物のAMS炭素年代測定をお願いしている。

発掘作業協力者

横田武夫 横田昌市 横田義治 赤木克己 牧野 保 牧野 勉 栢野 甲 山田 実
石井多米穂 難波多騏正（故）多田英雄 横田勝子 横田富美子 赤木浪江 牧野正子 牧野 弥
山田富子 赤木速子 橋本文子 石堂郁子

第Ⅱ章 地理的・歴史的環境

総社市域は岡山県南西部の内陸に位置する。市域のほぼ中央を高梁川が南流し、東部域は足守川で画される。北部域は中国山地に発し、県南部域に向かってのびる標高300～500mの広く浅い谷をもち、なだらかな起伏の高原状地形を呈する地形がつづく。一般に吉備高原とよばれるもので、その最南端麓下に総社平野がひろがっている。南域は平野の南に東西に走る200～300mの丘陵群が連なる。西域は吉備高原からつづく高原状地形が高梁川で分断され、南域と同様の丘陵群となる。西部域における平地部は高梁川の支流の新本川の、主として左岸域にひろがる小沖積地と谷部出口に小扇状地が形成されている。

現在の高梁川は、古代には川島川とか川辺川と呼ばれていたもので、北西から蛇行しつつ下りなが

ら、秋葉山のあたりからほぼ真南に下るが、古くは伯備線沿いのすこし東に流れていた時期もあり、そこから東方へ幾条もの分流が派生し、やがて足守川に合流し、吉備中山の南麓下にひろがる「吉備の穴海」に注いでいた。こうした高梁川とその分流による沖積作用によって造出されたのが総社平野であり、長い時代にわたって人々の生活拠点となった地である。

この地域の丘陵や山地部は、地質的には高梁川と足守川で画される地域は、主として花崗岩で構成されている。

鬼ノ城が構築された鬼城山から北部一帯にかけては花崗岩であり、東から東南麓下の丘陵部には山砂利層が点在する。足守川上流域は閃緑岩系の地質を挟むが、その南部丘陵域はまた花崗岩となる。平野南部の丘陵群も主として花崗岩で占められるが、部分的に閃緑岩や流紋岩地帯も含んでいる。

花崗岩はかなり風化が進んでおり、その風化土である真砂土の流失は著じるしく、鬼ノ城西域を流れる砂川は天井川化した状況である。

こうした状況の故か、この地一帯では明治前期から砂防工事が盛んに行われており、鬼ノ城一帯にも砂防石垣や砂防土段が多くみられるが、一部には近代以前に溯るらしいものも散見される。

ところでこの地域に先人たちの足跡が印されるのは、旧石器時代も終りちかくなってである。ナイフ型石器などの遺物が数点採取されているが、生活痕跡は確認されていない。

縄文時代になっても早期～中期の遺物は真壁遺跡などで出土しているものの、遺構は未検出である。平成2年（1990）から始まった岡山県立大学建設に伴う発掘調査は、対象面積約31haという広大なものであり、縄文時代後、晩期から中世にわたる複合遺跡として報告（南溝手遺跡、窪木遺跡）されている。中でも注目されるのは、南溝手遺跡出土の後期後葉の深鉢の内面に残る刳圧痕であり、この遺跡かその周辺においてイネが栽培されていたと想定されている。前出の真壁遺跡においても後期、晩期の遺構が検出されている。おそらくこの頃には古高梁川とその分流の沖積化がより進行、安定化し、生活基盤が整ってきたのであろう。

イネの栽培が本格化し、生業の中心となった弥生時代になっても前期の遺跡は南溝手遺跡や窪木遺跡、真壁遺跡など、沖積地に分布域が限られていたが、中期にはこうしたところだけでなく、西団地遺跡群のような低丘陵や塩田遺跡のような山間部にまでひろがりをみせている。遺跡が増加するのは中期後半から後期にかけてであり、分布域もより拡大しているが、沖積微高地の遺跡を除いては短期、限定的で継続性に欠ける傾向にある。しかし総体的にみると、総社平野内の集落遺跡については連続性はあるものの、遺構密度は低く、集落規模もあまり大きくはないようで、この点は足守川流域の高塚遺跡や津寺遺跡、加茂遺跡などのような遺構密度のたかい集落規模の大きい遺跡とは異なるようである。後期には墓制的な変化がみられ、共同墓地のみでなくそれらから卓出した首長墓として弥生墳丘墓が出現している。特殊器台・特殊壺に表徴される葬送儀礼専用の土器の分布と発達の中心は備中地方にあり、立坂弥生墳丘墓や伊与部山弥生墳丘墓は高梁川右岸の西部域にある。ほどなく古墳時代を迎えるが、特殊器台を伴う初現期の古墳とされる宮山古墳は高梁川左岸の三輪山丘陵につくられている。この丘陵には引き続き天望台古墳と三笠山古墳が築造されており、系譜関係の追える前期の古墳である。また平野周辺丘陵にも30～50m級の前方後円墳が数基つくられている。

五世紀はこの地域の最盛期である。畿内大王陵に比肩するとされる造山古墳、作山古墳の両巨大墳をはじめ、小造山古墳や宿寺山古墳などの大型墳やその他の中型墳が平野をとりまく丘陵上に多数築造されている。前期には備前地域が優勢であったようだが、この期には本域を中心とする備中地域の



- | | | |
|----------------|-------------|------------|
| 1. 鬼ノ城 | 8. 宿寺山古墳 | 15. 南溝手遺跡 |
| 2. 千引かなくろ谷製鉄遺跡 | 9. こうもり塚古墳 | 16. 稻寺廃寺跡 |
| 3. 随庵古墳 | 10. 江崎古墳 | 17. 三須河原遺跡 |
| 4. 津寺遺跡 | 11. 緑山古墳群 | 18. 天望台古墳 |
| 5. 造山古墳 | 12. 備中国分寺跡 | 19. 三笠山古墳 |
| 6. 作山古墳 | 13. 備中国分尼寺跡 | 20. 小造山古墳 |
| 7. 角力取山古墳 | 14. 窪木薬師遺跡 | |

第1図 周辺遺跡分布図 (S=1/40000)

勢威が際立っている。これらの被葬者の居館跡やかれらを支えた集落などは不明だが、興味を惹かれるところである。また周辺の丘陵上には低い墳丘をもつ小墳が多数築かれている。

こうしためざましい発展の背景には、この地域の人々のたゆまぬ努力と活動があったのはいまでもないが、新来の諸技術や製品が先進地からもたらされたことが大きく寄与している。

朝鮮半島との彼我の交流は、すでにこの時期以前に幾波にもわたる交流があったことはいまでもないが、五世紀代における朝鮮半島系考古資料は豊富である。古くは榊山古墳出土の馬形帯鉤が有名だが、近年の発掘調査では窪木薬師遺跡の鉄鋌やカマドをもつ住居跡、軟質系土器、高塚遺跡のカマド付き住居跡や朝鮮半島系土器、平野南部域の南に所在し港？の機能をもつのではないかとされる菅生小学校裏山遺跡の伽耶系や新羅系の土器、日本最古級とされる奥ヶ谷窯跡や土師器形態の須恵器や陶質土器形態の土師器などが報告されている。注目したいのは窪木薬師遺跡で、この集落は断続的ながら5世紀前半以降7世紀前葉にかけて鉄器製作に関係した集落とされ、6世紀後葉にはいわば鉄器製作の専業集落としての性格がみられるとされる遺跡である。この遺跡の北方3kmには鍛冶具一式を副葬した随庵古墳があり、その奥1km余には日本最古級で6世紀後半の製鉄遺跡千引かなくろ谷遺跡が所在するもの、なにやら暗示的である。吉備の枕詞は「真金吹く」である。日本の鉄製錬はこの千引かなくろ谷遺跡において始まり、同丘陵ではほぼ奈良時代まで操業されている。一方、高梁川支流の新本川流域の西団地遺跡では、7世紀代を中心に60余基の製鉄炉が検出されている。まさに古代の一大製鉄コンビナートであり、「真金吹く吉備」にふさわしい状況である。

こうした社会的分業生産の進展は新たな被葬者層を生み出し、後期には横穴式石室をもつ群集墳とよばれる小墳が各地に築造されている。こうした古墳には、この地では鉄滓を副葬するものが多いのも、先の状況の一端を反映しているのであろう。しかし小墳ばかりでなく、この地域では巨石を用いた大型の石室をもつものも多い。緑山丘陵上の4基は横穴式石室の形態変化をよくしめしており、すこし東南にあるこうもり塚古墳は、全長約100mの前方後円墳で巨石の横穴式石室は全国でも有数のものとしてしられる。また近くにある江崎古墳は、吉備最後の前方後円墳の候補とされる。吉備では造山古墳をピークに古墳の規模は縮小化の一途を辿るが、後期になっても有力氏族層はいまだ大きな力を保っていたのであろう。総社平野周辺では古墳の築造は7世紀後半ごろにはほぼ終了するが、末葉ごろに鬼ノ城と谷を挟んだ東方の丘陵に小さな方墳（千引7号墳）が築かれている。副葬品には円面硯があり、被葬者が官人である可能性がたかく、所在位置とも相俟って注目される場所である。この地域での古代寺院の建立は、まず高梁川右岸の秦原廃寺に始まる。7世紀前半の創建と考えられており、飛鳥期創建の最古の地方寺院のひとつとしてよく知られている。ついで白鳳期から天平期にかけて総社平野内には栢寺廃寺、三須廃寺が建立されている。一方、高梁川右岸の西部域の南にあたる隣町の小田川流域の真備町には箭田廃寺、岡田廃寺、八高廃寺の三寺がある。これら古代寺院の造立者は秦氏、賀陽氏、下道氏など吉備の有力氏族である。

律令制下の備中国は『和名抄』では管下に九郡を置く上国である。市域でいえば高梁川右岸の西部域が下道郡、左岸平野部の北部域が加夜郡、南部域が窪屋郡に比定される。国府は『和名抄』では「備中国府在賀夜郡」の記載があるが、いまだ確認できない。賀夜郡域を考えれば、いずれ総社平野内に所在することは疑いなかろう。郡衙についても全体像が確定したものはないが、部分的だがあきらかになったものに、窪屋郡衙の一部と推定されているものに「郡殿」墨書土器の出土した河原遺跡があり、また新本川上流域には大規模な建物跡が発見され、下道評衙の可能性が想定されている横寺

遺跡がある。

国分僧寺・尼寺も窪屋郡域の南の丘陵南辺に建立されており、すぐ南を東西に大路「山陽道」が想定されているが、発掘調査例は皆無に等しい状況である。また駅家についても、比定する遺跡はあるものの、調査範囲が限定的なものであったりして、確定するにいたっていない。

参考文献

- 光野千春・沼野忠之・高橋達郎『岡山の地学』山陽新聞社 昭和57年
光野千春・杉田宗満編集『岡山県地質図』（下部）内外地図株式会社
藤井 駿・加原耕作『備中湛井十二箇郷用水史』湛井十二箇郷組合 平成13年
『総社市史』考古資料編 総社市 昭和62年
『総社市史』通史編 総社市 平成10年
『岡山県史』考古資料編 岡山県 昭和61年
『総社市埋蔵文化財調査年報』1～10 総社市教育委員会 1991～2001
『総社市埋蔵文化財調査報告』1～16 総社市教育委員会 1991～2003
『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』86・100・107・120・124 岡山県教育委員会 1993・1995・1996・1997・1998
亀田修一「5世紀の吉備と朝鮮半島」日韓歴史フォーラム『鬼ノ城の成立をめぐる』2003
大橋雅也「備中国」『日本古代道路事典』八木書店 2004

第三章 平成13年度（2001）北門跡・高石垣ほかの調査

平成13・14年度における調査地の調査順序については重複しているので省略し、城堡については各壘状区間ごとに各の構成要素を含めて報告することとする。なお、記述にあたっては前報告（『鬼ノ城』鬼ノ城学術調査委員会 昭和55年刊）では、各折れごとに第・壘状区間と称しているが、当時の調査は城堡線を主体とした航空測量による壘線の確認が目的であったため、発掘調査を行っておらず、表面観察のみであったから、多少微調整を要するものがあることは致し方ないことであろう。しかし、新規の呼称に変更してしまうことは、かえって混乱を招くことになるので、旧称をできるだけ尊重しつつ、表3のような呼称を用いることとする。

一般に古代山城では、壘線の確認が充分に行われているとは言い難いものもあり、むしろ鬼ノ城は例外的でさえあり、以降の調査がスムーズに行えたのは、前調査の成果に大きく依存できたからであることは言うまでもない。

また、これまでに概要報告（『総社市埋蔵文化財調査報告』7～9、11）してきた内容についても、筆者の認識不足であったり、小トレンチによる推定に基づいたものであったため、今回の調査で修正を要するものがあるので、ここで改めておきたい。

なお、区間内の表示については前報告に則り、次区間側の先端部を頭部、前区間側を尾部と称する。

第1節 第3壘状区間

鬼ノ城の城壁は全長約2.8kmを測り、版築土壘や自然地形を利用した城壁が90%を占め、残る10%が石垣⁽¹⁾によって構成されている。城壁の築造には大量の土砂を必要とし水門石垣や石垣、そして版築土壘の基部に配列された外側列石や、城内外の敷石の敷設にいたるまで構築上欠くことのできない要素として石材が多用されている。平成13年度の調査地となった第3壘状区間には版築土壘、石垣、第

0 水門が1区間にまとまっており、情報量の多い調査成果となったが、その一つに石垣の調査が挙げられる。そこでまず問題になったのが石垣用語についてである。

石垣の構築技術は中近世から理論と実践を踏まえ、現在に至るまで発展してきた。江戸期や明治期に記された技術書以来、石垣の用語については不統一のまま継承されており、⁽²⁾ 語義にも様々な意味合いを包み、安易に古代の石垣に適用することは慎重を要する。

しかしながら、古代の石垣については用語が確立されておらず、中近世以降の石垣用語を援用せざるを得ないと考えるが、こうした場合、本来の語義や副次的な意味合いから石垣の解釈に混乱を招く可能性を危惧する。そこで用語については最大公約数的な意味合いの下に、下記のとおり整理することにしたい。なお、第3図の石材使用模式図にはいずれの使用法についても中間的な石材が存在し、分類が困難なものがある。それらは各部位の計測値に従い、各使用法に近いものへ分類している。

石垣用語

築石……石垣を構成する石材。

天端石…石垣の最頂部の石材。

根石……石垣の最下層の基礎石。

縦目地…石垣の目地が縦方向に入る状況を指す。

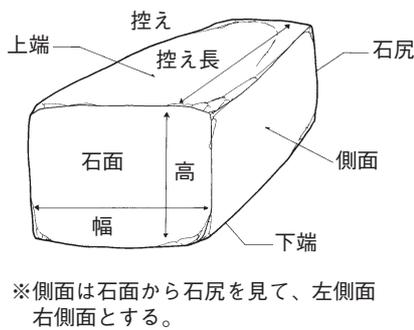
横目地…石垣の目地が横方向に入る状況を指す。

介石……築石等の下端にあり、石材の安定と傾斜調節に使用する石材。

詰石……築石との隙間に入れる石材。

裏込石…石垣の背後に充填する石材。

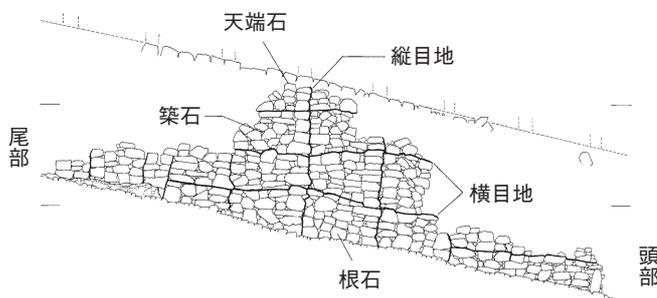
割石……自然石を割った石材を割石とする。



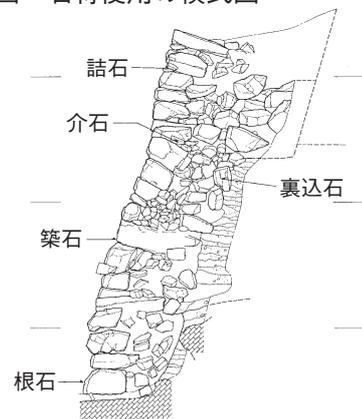
第2図 築石名称図

| | 立てる | 寝かす |
|----|-----|-----|
| 横長 | | |
| 縦長 | | |

第3図 石材使用の模式図



第4図 石垣名称図



第5図 石垣側面名称図